

草創の創価大学を語る

—第3回入学式と滝山寮の日々—

本 多 正 紀

皆さん、こんにちは。私は、3期生の本多正紀と申します。本日は、このような、機会を下さった創価教育研究所の皆さま、そして出席していただいた学生の皆さんに感謝申し上げます。誠にありがとうございます。

1973年、昭和48年ですが、私たち3期生の入学式の時、創立者の池田先生は初の記念講演でこのように言われました。「新入生の皆さんに対して、卒業してからのことを述べるのは、少々早すぎるかもしれませんが、いかなる地、いかなる場にあっても、母校を思い、母校を誇りとし、母校を守り立てていく皆さん方であってほしいというのが、私のお願いであります」。創立者のこの警咳に触れた一人として、母校のため、後輩の皆さんのために、少しでもお役に立てればとの思いで来させて頂きました。今日は、(1)創価大学草創期と創立者、(2)第3回入学式講演「創造的人間たれ」、(3)寮生活の日々などをテーマにお話をしたいと思います。どうか皆さん、宜しく願いいたします。

(1) 創価大学草創期と創立者

先日、家族からLINEでユーチューブのアドレスが送られてきました。タイトルを見ると、NMB48の山本彩(さやか)卒業シングル「僕だって泣いちゃうよ」と。見てみると、本当に驚きました。なんと、NMBのメンバーが歌い踊る素晴らしい映像と音楽の背景にそびえ立つのは、我が母校の池田記念講堂ではないですか。すごいセットが組まれていましたが、皆さんもご覧になりましたか。

テレビのドラマにも何回も出ていますね。今や創大キャンパスはロケの聖地と言われるまでになっています。私が入学した頃の創大は、ラーニング棟と昔の体育館とグラウンドがあるだけのキャンパスでした。無論、こんなにも発展するとは、想像だにできませんでした。今年で創価大学は創立47年、ほぼ半世紀を迎えるわけですが、私が入学した頃とは別の大学と言っても良いくらいです。

これから、草創期の話をさせて頂きますが、時の流れという上では、皆さんが生まれる遙か前の時代の話です。確かにそうですが、大学は学生にとっては4年間の未知の体験をするところ

す。誰にとっても、初めての体験であり、常に自分にとっての草創期と言えるのではないのでしょうか。ですから昔話と思わず、草創期のキャンパスに自分もいると思って聞いて欲しいのです。創立者のお話もしますが、そのご指導や指針も、今の皆さんに直接語られていることと受け止めて頂きたいと思います。

まず創価大学創立の原点から確認していきたいと思います。

創価大学の設立が構想されたのは、創価学会の戸田城聖第2代会長と若き22歳の池田先生の師弟の対話からでした。それは、今から68年前の、私もまだ生まれていない、1950年（昭和25年）11月16日です。当時、戦後経済の混乱の中で戸田先生が経営していた会社が営業停止となり、学会の理事長職も返上するという窮地のさなか、ただ一人師を支えていた池田青年に戸田先生は語ったわけです。

小説『新・人間革命』にはこう綴られています。

「伸一、大学をつくろうな。創価大学だ」「人類の未来のために、必ず創価大学をつくらねばならない。しかし、私の健在なうちにできればいいが、だめかもしれない。伸一、その時は頼むよ。世界第一の大学にしようじゃないか!」

最悪の事態のなかで、しかし師は弟子に、遠大な未来を見据えて大学設立の希望を語り、実現を委ねたのです。ちなみに、聖教新聞創刊の構想が語られたのもこの年の8月24日のことでした。

創価大学の創立は、三代にわたる師弟の精神の結晶として、池田先生が託され、断じて成し遂げると誓われた一大事業でした。しかも、「世界第一の大学にしようじゃないか」と。

この一言、現にその歩みは着実に進んでいますが、創大の全ての卒業生、現役生、教職員の方々が、この原点を絶対に忘れず、私たちが創立者から託された目標として、世界第一の大学実現へ前進し続けて行かなくてはならないと思うわけであります。

それと、もう一つ。開学に掛けた創立者のご苦勞はどれほどのことであったかということです。土地や教員の確保やさまざまな許認可など多く関門があったと思います。大学の開設資金もそうです。創立者は、それも書き残して下さっています。

創立者が創価学会の第三代会長に就任した1960年当時、学会には、学校をつくるような財政的な余裕は全くなかったといわれます。どうしたか。結局、創立者お一人が、原稿を書き働きに働いて、設立の資金をつくるしかなかった。創価学園の設立にも、先生はご自分の印税を投じられました。創価大学の開学に際してもそうでした。

大学の設立には、当時のお金で約60億円が必要でした。ちなみに、71年当時、ラーメン一杯180円、大卒男子の初任給が36,000円ぐらいという時代でした。その60億円のうち、創立者は自分の全印税7億円を投入され、また、先生の出版物による学会収益の25億円も使われた。さらに、学会本部からの寄付金16億円。それでも足りず、学会の会員同志に呼びかけやむなく寄付金を公募しました。そして、12億円が集まり、創価大学が設立できたと記されています。

ここに分かるように、創価大学は創立者がご自分の生命を削るような血のにじむ努力の末にできた大学であるということ。さらに、当時は皆まだ貧しいなかでしたが、その創立者の構想実現に参加したいとの学会員の真心によって、汗と涙の浄財によって、建てられた大学ということです。

この広大なキャンパスの施設一つ一つに、私たちが踏みしめる敷石の一枚一枚に、創立者の、そして創立者と心と同じくする無名の庶民の方々の、創大生への大きな期待が込められているわけであります。まさに民衆立の大学として誕生し、「大学に行けなかった人のために尽くす大学」を標榜する創価大学です。素晴らしいキャンパスで学ぶとき、この誇りと感謝と使命を忘れない、英知を磨くは何のためを忘れない、というのが創大精神であると思うのであります。

こうした苦勞の末に、創価大学は1971年（昭和46年）に開学します。しかし、開学式や入学式に創立者の姿はありませんでした。このように開学当初、来学される機会は多くありませんでした。

ちなみに、草創期の歴史を振り返るために、私は開学の71年から79年頃までの「創価学会三代会長年譜」を全て読み返して見てみました。そうしますと、大学行事以外に、学会の行事で来学された時も含めると、開学初年度の1971年度は7回、2年目の72年度は6回です。しかし、3年目の73年度になると22回、4年目の74年度は40回、5年目の75年度は45回、6年目の76年度は28回で、飛躍的に増えていきます。私が3期生として学部在籍した4年間でいえば、135回、大学院に行った2年間も含めると6年間で174回来学してくださっています。それだけでなく、創価学会の会長としてまさに席の温まるいとまもないほど、世界を回り、全国の同志のために連日東奔西走されている創立者が大学に来てくださることは、どれほど大変なことか。

その上で、開学当初その機会が多くなかったことにはいくつかの背景がありました。先生ご自身がこのように言及されています。

「一期生の入学式の時は、私は出席してあげられなかった。新入生の諸君と、わずかな教職員、そして御父母の方々が入っても、会場の中央体育館はガランとしていた。一九七一年（昭和四十六年）の四月、当初の予定を二年早めての開学であった。国内には大学紛争、世界でもチューデント・パワーの嵐が吹き荒れた直後であった。行き詰まった教育界に希望の暁鐘を打ち鳴らすためにも、一日も早く、創価大学をスタートさせることを決断したのである。このため、創価高校の第一回卒業生も、開学に間に合うことになった」（「随筆『新・人間革命』」）

つまり、一つは、当初、創価大学の開学は73年（昭和48年）にするとの計画で進んでいた。しかし、当時、大学紛争の嵐が吹き荒れるなか、真の大学教育を目指して開学を早める必要があったことや、創価高校の一期生が卒業する年でもあるということから予定が2年繰り上げられたのです。

また創立者は、こうも綴られています。

「大学の運営に関しては、学長をはじめとする教職員に任せようと決めていた。もちろん、困

ったことがあれば、相談にはのる決心であった。だからといって、学長など、大学を担い立つべき人たちが、いつまでも創立者である自分を頼りにして、自立できないようでは困ると思った。創価大学がめざしているのは、“学生参加”を原則とした、新しい理想的な学園共同体である。教職員は人を頼むのではなく、大学のことは、すべて自分たちが責任をもつのだという強い自覚を、早く固めてもらいたかった」(小説『新・人間革命』)と。

さらに、当時の一部教員のなかには、教育や学問研究は教員が責任を持ってやっているのだから、大学は学会の会長である創立者とは距離を置くべきだというような、考え違いをする教員も多少いたようです。

しかし、創価大学の学生は、創立者を慕い、その人間教育を求めて集って来たわけで、一日も早く、創立者に大学に来ていただきたいという声が、全学生の中に、教職員の中に強く強く湧き上がってくるのは必然のことでした。

何としても創立者をお呼びしようという機運が全学に生まれるなかで、初年度の秋11月21日、全くゼロからの出発で、第1回の創大祭が行われ待望の創立者来学が実現します。

創立者は「学生の皆さんの招待ならば、私は必ず行きます」と学生の願いに応えてくださった。そして、記念フェスティバルの席上、「今後、諸君の後には、何万、何十万という後輩が陸続と創価大学の門をくぐることでしょう。その後輩たちのためにも、先駆を切って、道なき道を開き、建学の精神に貫かれた人間教育の軌道を作っていただきたいのであります」と万感の思いを込めて語られたのです。

その創立者を求める魂がさらに輝くのが、開学2年目に行われた第1回滝山祭、第2回創大祭であり、創立者と学生、教職員が一体となった大学建設の大きなうねりが生まれていったのであります。

この第2回創大祭の時に、創価大学で草創期から今も歌い続けられる唯一の歌、「学生歌」が誕生します。そのとき創立者は、「創価大学は本来、明年開学の予定であった。それを2年早めて開学した。本来は、君達は学生ではなかった。従って君達も私と同じ創立者である。その誇りと使命をもって、来年の3期生を、この歌で迎えていこう」と言われました。

この1期生、2期生が築いてくれた草創期の苦闘の日々が、「自分たちが、創立者を求め、創立者とともに、理想の大学を建設するんだ」という開拓精神が、創大の学生魂となっていく出発点になったのです。

(2) 第3回入学式講演「創造的人間たれ」

私が入学した第3回入学式の記念講演のことをお話しさせていただきます。初年度、2年目と1期生、2期生の先輩たちは、まさにゼロからの出発で創大の伝統を築き、創立者に大学へ来ていただく場が開かれていったわけですが、入学式には第1回も第2回もご出席されませんでした。そのなかで、大学公式行事の入学式に何としても創立者を、との全学挙げての悲願が73年の第3回入

学式でついに実現することになったのです。

先に触れたように当初、73年に創価大学を開学するという計画だったことから、開学3年目にあたるこの年を、いわば「真の開学の年」と位置づけ、新しい本格的な大学建設の出発の年にしようとの気概が全学にあふれていました。

学生自治会では、創立者を入学式へ招くことを代議員会の議題とし、満場一致で可決したそうです。創立者は学生の総意であることを聞かれ、「学生諸君の強い要望ですから、創立者として、出席しないわけにはいきません。喜んで出席させていただきます」と出席を決定され、初の記念講演を行うことも約束してくださった。

それが、創立者講演の草創三部作といわれ、創価大学論ともいうべき「創造の人間たれ」の講演です。改めてその内容を確認したいと思います。

創立者は、講演の冒頭でこう言われます。「言うまでもなく、創価大学は皆さんの大学であります。同時にそれは、社会から隔離された象牙の塔ではなく、新しい歴史を開く、限りない未来性をはらんだ、人類の希望の塔でなくてはならない。ここに立脚して、人類のために、社会のために、無名の庶民の幸福のために、何をすべきか、何をすることができるのかという、この一点に対する思索、努力だけは、永久に忘れてはならないということを、申し残させていただきます」

これこそ、創価大学開学の意義を端的に示されたものと言えます。その上で、大学、学問というものの意義に言及されていきます。

まず「大学というものが、社会にいかなる影響を与えるか」を歴史的に考察され、14、15世紀のルネサンス＝文芸復興はどうして起こったか。それは、単に文学、芸術の広場で偶然に起こった変革だったのではなく、その前段階に「学問の大復興、大学の発生という、より深い地盤からの胎動」があったことを示されます。

では、この学問復興の精神的機軸となったのは何かといえば、人文主義、すなわちヒューマニズムだった。人間を見つめ、真理を追究する旺盛な知識欲というものだった。このことを通し、「歴史を動かす要因は、自由なる人間の思索であり、生命の潮流である」と結論づけられました。

このことに関連し、「人々は、ともすれば、表面に現れ、残された歴史の精華だけを把握しようとし、そして、その形式だけをまね、伝統だけを重んじて、自らの行動原理としてしまう傾向が強すぎる。それらの業績を推し進め、達成させた、より深層部の原因に目を向けようとしない。そこに過去のさまざまな変革の失敗があったとも私は見たい。目前の成果に目を奪われ、その達成のみに明け暮れる行動は、所詮、徒労に終わらざるを得ない」と指摘されました。

この創立者の洞察は、あらゆる社会も、団体の未来にも当てはまる大事な視点、ものの見方ではないか。私たちも忘れてはならない視点ではないかと思えます。

次に、創立者は大学、学問の使命について、論を展開されました。すなわち、大学において、いかなる意義ある研究・教育が行われているかによって、国家あるいは社会の、ひいては文明そのものの消長が決まるということ。その学問も、あくまで人間を基調にしていかなければならないということです。

古代における最高学府として有名なプラトンが創立（紀元前 400 年頃）したアカデメイアや釈尊の教育法を例に挙げて、それらが、歴史に大きな影響を残している原因は、真理の探求に当たって、どこまでも人間を基調にし、その本質を解明し、特性を啓発することに最大の目標をおいたからに他ならない。逆に、人間的なものに根を持たない学問や真理の探究は、抽象的で空虚なものとなるか、軽薄で底の浅いものになるかいずれかであろう、と指摘。人間らしく、真実の人間の復興を勝ち取るべく、学問の道を、真理探究の大道を歩んでいくところに、本来の大学の使命がある、と論究されました。

こうした大学の本来の使命を認識した上で、創立者は私たちに、「創造的人間であれ」と熱望されたのです。いわく、我が創価大学の「創価」とは、価値創造ということである。すなわち、社会に必要な価値を創造し、健全な価値を提供し、あるいは還元していくのが、創価大学の本来目指すものでなければならない。したがって、創価大学に学ぶ皆さん方は、創造的な能力を培い、社会に対し、未来性豊かに貢献していく人となっていただきたいのである、と。

では、その創造性を養うには、やはり「人間とは何か」という人間学に戻らざるを得ない。生命・人間というものを直視し、その開発を目指すというところに、創造性の鍵はあると示され、創価大学はこの人間学の完成をめざし、その基盤の上に、学問の精華をちりばめて社会変革の原動力になっていくよう訴えられ、「創造的人間であれ」ということを、皆さんはもとより、創価大学の永遠のモットー、特色、学風にしていってはどうかと示されました。

最後に、「私のこれからの最大の仕事も教育であります。それは、21 世紀の人類を、いかにしたら幸福と平和の方向へリードしていけるか、この一点しか私の心にはないからであります。その心から、私は皆さんに、人類の未来を頼むと申し上げておきたい」と結ばれたのです。

この創立者の講演は、創価大学の、崇高な使命を高々と掲げる講演でありました。誰もが、深い感動を覚えました。この「創造的人間たれ」との指針は、創価大学に学ぶ私たちが生涯をかけて追求していくべきテーマでもあると思います。またそれは、師匠から与えられた、人間としてのあるべき姿、目標点ととらえて思索し、探求し抜いていきたいと思うのです。

創立者は、「人間とは何か」という人間学に戻るべきであり、その開発を目指すというところに、創造性の鍵はあると強調された。これは、45 年前の講演ですが、21 世紀の現代にあって、まさにこの観点は時代の要請となっていると言えるのではないのでしょうか。

先日、評論家の田原総一郎さんが創価学会の強さを探るという視点で、その名も『創価学会』という本を毎日新聞出版から発刊されました。それを読んでいて、まさにこの思いを深くしました。

田原さんは、今後、人間の生、生きるということに最もインパクトを与える科学技術は二つある。それは iPS 細胞が開発されたこと、もう一つが AI（人工知能）の急速な進歩だといっています。

iPS 細胞は、早ければ 2020 年には医療現場での応用が実現するといわれていて、これから寿命は確実に延びていく。寿命革命の時代がついにやってくる。120 歳まで生きられる社会が実現してくだらうともいわれる。

その一方で、AIの開発により、人間がこれまでやって来た仕事の多くは、近い将来にAI、またそれを応用したロボットに取って代われ、人間のやるべきことはどんどん減っていくと予想されている。

2015年に発表された、オックスフォード大学の研究者と野村総合研究所の共同研究では、10～20年後には日本の労働人口の49%が就いている職業が人工知能にとって代われる（ことが可能になる）という結果さえて出ている。その通りになったら大変です。しかし、すでに現在においても、無人のコンビニが登場し、車の自動運転の研究はかなり進んでおり、小説や絵画をかくAIも話題になっています。

つまり、寿命は延びるが、同時に生き甲斐である仕事はなくなっていく。さあ、こういう現実をどう受け止めればいいのか、暮らしや経済はどうなる、人々は何を心のよりどころとし、どう生きていけばいいのか。

この話は皆さんが、これから生きていく日本のそして世界の未来はどうなっていくか、という有力な予測ととらえられるものです。まさに激動、大変化の時代です。これまでのものの考え方や社会の制度、家庭や仕事の在り方、全てにそれは影響し、変わって行かざるを得ない。そこでは、何が求められるのか、単に仕事がなくなるというだけではなく、新しい価値観や新しい仕事さえ生まれるでしょう。それはどういうものか。まさに、もう一度人間というものを直視し、そこから出発して生み出していくべきものばかりです。まさに「創造性」が問われる時代です。皆さんの力にかかっているわけです。創立者が「人類の未来を頼む」といわれた意味が大きく響いてくると感じるのは私一人ではないと思います。

(3) 滝山寮の日々

1973年4月、私たち3期生は、創大生としてスタートしました。当時のキャンパスは、ラーニング棟と体育館、グラウンド、それと滝山寮が主な施設で、それでも広いと思いましたが、現在の大発展ぶりからすれば、こぢんまりとしたものでした。栄光門が“正門”で、栄光門の脇のバス発着所は当時からあって、そこが創大生の唯一の足でした。

滝山寮は12人一部屋で、中寮が経済学部、東・南寮が法学部中心、北寮が文学部という構成でした。朝と夜は食堂で食事ができ、食堂の上が大広間の集会室になっていて、全寮生の会合などができました。寮生活はほぼ完全に、寮生自身の運営に任されていました。各部屋に残寮生の先輩が2人ほどいて、室長となり、各寮のことは寮長を中心に室長会で決めていくという形でした。

開学3年目を迎えたこの年から創立者の来学は頻繁となり、創価大学を中心にして池田先生の世界的な戦いが音を立てて開始されたかのごとき感がありました。

創立者の世界平和とそのフォートレスたる創大建設に賭ける並々ならぬご決意と行動は、学生一人一人にも強く伝わってきました。

その頃生まれたのが、「創立者と共に創立者の精神で」という合言葉でした。創大に学ぶ使命

と誇りを胸に、寮生も勉学にそして大学建設に、また学会活動に没頭しました。学生部の組織も先輩とのつながりで八王子以外に所属した友も多く、活動を終えるとバスもなく、八王子駅から寮まで歩いて帰ることもたびたびで、珍しいことではありませんでした。とくに寒い冬は大変でした。皆、経済的には貧しく、アルバイトに精を出すメンバーも大勢いました。今になれば、その一つ一つの経験が貴重な青春の宝です。

1969年（昭和44年）、創立者は、創大の設立について述べた講演で、寮の構想を発表され、学生寮を教育の場として、積極的に取り入れていたことも創価大学の特色の一つになったといえます。かつての旧制高等学校がそうであったように、学友同士が寝食をともにしながら、深い友情を結び、人間的な啓発を図ろうと、大学をあげて、寮の充実に力が注がれたのです。

ところで、この滝山寮の名前ですが、これは1期生の先輩である田代理事長が全寮代表のときに決まったものです。はじめは、「男子寮」の1号棟、2号棟という味気ない呼び名でした。2年目を迎えるに当たって名前を付けようということになり、「この近くに滝山城址があるから、滝山寮というのはどうだろう」と。四つの棟も、「東寮」「南寮」「北寮」、そして「中寮」となりました。そのことを創立者に報告すると、「滝山寮か。ロマンがあっていいね。しかし、滝山城は落とされたりしていないか、調べた方がいいよ。落城していたら元気が出ないからね」とのご指摘。先輩たちは、慌てて史料にあたり、八王子の歴史を研究すると、滝山城は、丘陵の地形を巧みに利用した、難攻不落の関東屈指の名城であったことがわかったのです。

寮生活といえば、なんとといっても忘れられないのは滝山祭です。創立者が滝山寮を初訪問されたのも、開学2年目の7月、第1回滝山祭に来学されたときです。初日の7月6日、雨の中、初めて滝山寮を訪られました。創立者は南寮の一室を訪れ、寮生たちのベッドを見ると、「みんな、ここに寝ているのか」と言っ、ゴロリと横になり、両手を大きく伸ばし「うらやましいな。ほくも、こんなところで、思う存分、本を読んで、勉強したいな」と語ったと小説『新・人間革命』にあります。

以後、創立者は来学された時に、滝山寮以外の男子寮、女子寮にも足を運ばれ、寮生と懇談したり、食べ物や日用品の差し入れをしてくださったり、折に触れては励ましに次ぐ励ましを送り続けてくださいました。

開学3年目の73年7月、第2回滝山祭が盛大に行われました。創立者は初日には「スコラ哲学と現代文明」の記念講演。これも草創三部作の一つですね。

滝山祭では、創立者は学生たちのなかに飛び込むようにして共に過ごしてくださいました。30度を超す暑さのなか、麦ワラ帽子を被り、寮の前の道に立ち並ぶ模擬店を回って励まされ、浴衣にわらじ姿の寮生が担ぐ手作りの駕籠にも乗ってくださいました。名づけて「諸天のかご」です。手作りの彫刻の像を除幕、将棋大会にも特別参加し寮生と一局。学生が負けました。創立者は汗ビショリになりながら励ましを送り続けられたのです。

滝山祭の掉尾を飾って、3日目の夕方から体育館で行われた盆踊り大会にも、寮生から贈られた浴衣を着て、参加されたのです。この盆踊り大会には、学生だけでなく、父母たちや地元の市民も数多く参加されていましたが、皆、大喜びでした。さらに、創立者は太鼓のバチを手にし、学生たちの生命に轟けとばかりに、力いっぱい叩かれた。少しでも、皆に思い出を作ってあげたい、創大生がんばれ、寮生がんばれ!との創立者のご慈愛に心から感動しました。叩き終えた先生の手を見て、滝山祭の実行委員長であった1期生の三好さんが、慌てて絆創膏を用意し、貼らせて頂くという場面もありました。創立者は、「私は学生の味方です。徹底的に動き、徹底的に激励に走る。この五体が、たとえ動かなくなろうとも、私は学生を守るために働きます」と語られています。まさにその万感の思いが込められた創立者の姿でした。

私が3年生で全寮代表の時には、各寮、部屋やサークルに呼びかけて山車を作り、八王子市内のメイン商店街で創大と滝山祭を市民に広くアピールするパレードまでやりました。キャンパスでも行い、創立者はそのパレードにも声援を送っていただきました。

私たちの時代の滝山寮の歴史で特筆すべきことといえば、盛大を極めたこの滝山祭とともに、中国からの留学生の入寮も忘れられない出来事でありました。

1972年9月に日中の国交正常化が実現します。中国政府はこれを受けて本格的な国作りのために、初の国による正式な留学生を日本に派遣する決断をするわけです。しかし、当時の日本には中国からの留学生を受け入れる大学がなかった。そこで、74年の年末に中国側から寄せられた受け入れの要請に、創立者は快く応じられ、自らが身元保証人になられ、75年4月、男子4人、女子2人、計6人の留学生が創大に入学するのです。そして、留学生は男女それぞれ寮に入り、共に創大生として生活を送っていくのです。この時、私は滝山寮の全寮代表をしていました。

その日、滝山寮は弾んでいました。創立者が中国からの留学生6人とともに、入寮式に出席されたのです。75年4月7日のことでした。当時、創価大学は開学5年目。教育環境も整い、創立者が毎月のように来学され大学建設の情熱が学内に満ちあふれていました。

時を同じくして、先生は世界平和への対話を本格的に展開され、前年5月に第1次訪中、9月にはソ連初訪問へ。12月の第2次訪中で周恩来総理と会見が実現するという、まさに歴史的な戦いが繰り広げられていたときです。私たちは、創立者のもとで、日中友好の歴史の一翼を担える感動にまさに胸を躍らせたのです。

滝山寮集会室での入寮式に中国留学生とともに出席された創立者は、留学生を「ようこそ! よくいらっしゃいました」と真心で迎えながら、共に寮生活を送る5期生に対して、「この留学生との友情を軸として、未来永劫にわたる中国の友人となり、両国間に大きく美しく、そして尊い絆の歴史を築いてほしい」といわれ、皆で歌を歌って歓迎しようとの提案に私たちは夢中で愛唱歌を歌ったものでした。

創立者はさらに「浅きを去って深きに就くは丈夫の心なり」という御文があります。日本の学生は“浅き”に進もうとしている。何のために大学にきたのか。何のために学ぶのか。何のた

めの知識か。この“何のため”という根本精神を忘れてしまっている。丈夫とは革命家です。人民のため労働着を着て、人民のために奉仕するという中国の精神を学ばなくてはならない。いずこにあっても、いつになっても、丈夫の心をもっといただきたい。あの大学はこうだから、時代はこうだからと甘えた心では二流三流の生き方です。真の意味で、連続革命の担い手として、どのように人民に奉仕していくかが大事なんです」と語られ、さらに「八王子は寒いから体を大切にしてください。風邪をひかないように。親元から離れてもう甘えられないし、今日からは、自分で自分の体に戦っていきなさい。一人で頑張ってるんだ。どうしようもない時は、助け合ってやってください」と語られたのです。

入寮式が終わると、創立者は留学生とともに歩いて大学キャンパスを案内されました。寮から今の栄光門に向かう坂道には全寮生が並び、創立者は美しい夕日に照らされた一人一人の顔を見つめ、励ましの声をかけながら歩みを進められたのです。寮生は生涯忘れないと思います。

この中国からの留学生の方たちは、程永華駐日大使、許金平中日友好協会副会長など皆外交や日中友好の最前線で活動しています。

程大使が就任したのは、2010年2月28日です。駐日特命全権大使として連日、フル回転のスケジュールのなか、3月9日には就任の挨拶に来られ、聖教新聞社で創立者と会見されました。懇談のなかでこの入寮式のことを話題になり、「先生は、私たちの入寮式にも出てくださいました。その時日本語を教えてくださいました。コップに入った水を指して、これを日本語で何と言いますかと。水です、と答えると、先生は、これは日本ではおひやというんだよ。僕は江戸っ子だから、おしや、になっちゃうんだけれどね、とおっしゃいました。それから、桜吹雪のなか大学構内を案内してくださいました。その時、周桜と私たち6人の名前を付けた桜の植樹を提案してくださいました。忘れられません」と程大使は懐かしく語っていました。程大使も許副会長もたびたび来学され講演をしていますので、皆さんも聞かれたと思います。

ソ連からの留学生だったガルージンさんも、現在、駐日ロシア大使です。世界とアジアの平和を考えたとき、最大の要となる両国の駐日大使がいずれも先生の下で学んだ創価大学出身です。創立者が世界とアジアの平和の基を築いてくださっていると実感します。

創立者から頂いた、「浅きを去って深きに就くは丈夫の心なり」、創大生はこの心で行けと励まされた意味をかみしめたいと思います。どこまでも民衆のため、社会のために尽くしていくという使命感に立ち、あえて労苦を引き受けていく丈夫（ますらお）たれ、という精神であると思います。以来、この精神が滝山寮の伝統となりました。この「丈夫」の生き方を、それぞれの道で実現していく。その創大魂、寮生魂を生涯、堅持していきたいと思うのです。

最後に、忘れられない光景として、私が1年生の時の73年10月、第3回創大祭の初日に、企業の代表ら約700人を招待し、祝賀会を催した時の創立者の姿に触れたいと思います。会場は中央体育館（当時）。翌々年卒業を迎える1期生の初めての就職活動に備えて、来賓を招いて行われたのです。来賓は驚きました。創立者が出迎えていたのです。一人一人に、深く頭を下げている

く創立者。相手が年上でも年下でも、その姿は変わりませんでした。

そして、創立者は企業関係者に対して「創立者の池田です。学生が就職活動で何った折には、どうか、よろしくお願いします」「創大生は私の命です。純粹で限らない可能性をもっています。来年、1期生の就職活動が始まります。どうか、創大生をよろしくお願いします」と言われ、手にした名刺を一枚一枚、丁寧に差し出しながら休むことなくあいさつを続けられたのです。

創立者は常々、語っておられます。「創大生の栄光の未来のためには、いかなる応援も惜しまない」「私が、世界の人々のなかを駆けめぐるその胸中には、常に大切な、そして心より信頼する諸君の存在があったことを知っていただきたい」と。このような創立者を持つ大学が日本中、世界中にあるでしょうか。私はそう思うと、創大生の使命の大きさと創立者への尽きせぬ感謝を心の底から実感するのです。

今日は、草創期の創立者の来学のご様子、ご指導を中心に話してきましたが、冒頭にも申し上げましたが、これは昔話ではありません。この創立者の心は、現在の今日ここにお集まりの皆さん一人一人に全く等しく向けられているということを忘れず、かけがえのない創大生としての日々を勝利して行って欲しいと願っています。創価大学のますますの発展と若き後輩の皆さまの勉学と世界への雄飛をお祈りし、つたない講義ではありましたが終わらせて頂きます。長時間ありがとうございました。